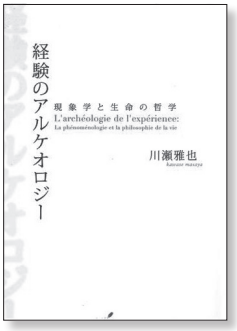

自著紹介

『経験のアルケオロジー——現象学と生命の哲学』

（勁草書房、2010年12月）

川　瀬　雅　也
（島根大学教育学部共生社会教育講座准教授）

学問とは、通常、「知らない」ことを研究して「知る」ようになることをめざすものだろう。つまり、未知を既知に変えることをめざすものだと言える。しかし、哲学という学問はそのあたりが少し異なる。哲学が解明しようとするのは、多くの人がすでに「知っている」ことである。つまり、多くの人にとっての「既知」こそ、哲学にとっての課題なのだ。いったい、どういうことだろうか？

「多くの人が知っていること」が哲学の課題になるというのは、決して、哲学が少数の知らない人のためにあることを意味するのではない。そうではなくて、哲学は、多くの人が「知っている」ことが、実は、多くの人が「知っていると思っているだけ」のことではないのか、と問うのである。人々が「既知」だと思っていることは、本当に「既知」だと言えるのか、を問題にするのである。

既知のこと、すでに知られたことは、当たり前だとみなされ、未知を探究するための土台、前提とされる。当たり前として前提されることは、そこから問いが出発する土台なので、通常、それ自体が問われることはない。だが、哲学が問題にするのは、まさにこの土台、前提である。例えば、いま私は「未知を既知にする」と言った。誰でもが、この言葉の意味を理解するだろう。だが、そもそも未知と既知の相違はどこにあるのだろうか？　何が分からないことを「未知」と呼び、何が分かったことを「既知」と呼ぶのか？　さらに、「知る」とはいったい何を意味するのだろうか？　このように問われると、分かっていたはずの言葉の意味が、目の前で次々と瓦解していくような気持ちにされるだろう。私たちは、本当は分かっていないことについて、どれだけ「分かったつも

り」になって事を運んでいることだろうか。もちろん、そうした姿勢を批判しようというのではない。おそらく誰でもが（私だって）、「分かったつもり」で事を運ばなければ、まともに日常生活を送ることさえできないだろう。しかし、自分が「分かったつもり」であることを知っているのと、知らないのとでは、つまり、「自分は本当は分かっていないということを知っている」のと、「自分が分かっていないことすら知らない」のとでは雲泥の差がある。哲学はそこを問題にする。まずは、「自分が本当は分かっていない」ことを知ること、そして次には、その分からないことについて探究する姿勢を持つこと、これが哲学的課題なのだ。

「経験」というものも、日常的には分かっていること、分かったつもりになっていることだと言えるだろう。目を開けば事物が見える。音や匂いを感じられる。食べる、飲む、話す、住む、通う、などなど、「経験」というのは誰にとっても全く自明の事柄である。だが、哲学にとっては、当たり前こそが問題となる。当たり前であるということは、多くの人がそこに問題があることに気づいていないことを意味するのだから、哲学にとっては、当たり前であればあるほど、大問題となるのだ。「経験」もその「大問題」の一つだと言えよう。拙著『経験のアルケオロジー』は、まさに、この「大問題」としての「経験」をテーマにして、経験の構造はどのようになっているのか、経験はどのような源泉から可能になっているのか、そして、経験の深層にはどのような世界が広がっているのか、という問題を、哲学的な観点から探究した学術書である。

だが、拙著は、ただ単に「経験」を哲学的に探究しているだけではない。拙著でこのテーマを選んだのは、実は、現代哲学の一つの潮流として「経験のアルケオロジー」という動向が存在していることを示すためであった。本書では、主に20世紀の100年を見渡し、その中で、フッサール、ベルクソン、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、ミシェル・アンリなどのドイツ、フランスの哲学者たちを取り上げているが、こうした諸々の哲学者の思想のうちに、「経験の起源の探究」（アルケオロジーは「考古学」を意味するが、それはもともと「起源の探究」という意味であった）という共通の動向が認められることを解明し、そうした探究のたどり着いた地点を見極めることが本書の狙いだったのである。

20世紀のドイツ、フランスの思想のうちには、「経験のアルケオロジー」と名づけることのできる動向があり、それは、経験の構造の解明から出発して、その起源を突き止め、さらには、経験の底を破った先に現れる経験の深層へと探究を掘り下げていった。こうした探究が、どのような筋道を通り、どのような深層世界を見いだしたのかについては、ぜひ、本書を手に取って確かめていただけたらと思う。

哲学の入り口というのは、実にたわいないものである。「経験」などまったくありふれていて、つかみどころさえない。私たちは、日常的な「経験」を土台として、その上で諸々の問題（科学、政治、経済、文学、芸術等々の問題）に関わっているのだから、この土台そのものは考察の視野のうちにさえ入ってこない。「経験」など、問題にさえならないつまらないものである。だが哲学は、とりわけ、20世紀の哲学は、この「たわいない」、「つまらない」経験のうちにこそ、人間の存在を本質的に理解する鍵があると考えた。その探究は実に豊かで、深遠なものである。「たわいない」、「つまらない」入り口の下には、実に豊かで、複雑で、しかし、調和の取れた目もくらむばかりの世界が広がっている。あたかも、何の変哲もない、ありふれた地上の洞穴の下に、清らかな水をたたえ、鍾乳石と石筍という自然の造形美に彩られた鍾乳洞の大伽藍が広がっているかのごとくである。もし、入り口のたわいなさにあきれ果てて、その下を覗き込みさえしなければ、私たちは、地下に広がる豊饒の世界に気づくことも、それを掘り下げることもできないだろう。哲学は、たわいない出来事のなかにこそ、計り知れない探究の糸口を見いだすのである。

拙著『経験のアルケオロジー』のテーマである「経験」は実にたわいない。だが、もし拙著を手にする機会があるならば、そのたわいなさの中にどれだけの豊かさと奥行きが包含されているかを、ぜひ覗き込んでいただけたらと思う。